

発表題目 聖徳太子と真田幸村に言語哲学者は何を思うか

竹内泉 (Takeuti Izumi)

産業技術総合研究所

相異なる複数の信念を記述するには、 $x=y \supset \Box x=y$ が恒真でない、即ち $x=y \wedge \Diamond x \neq y$ が充足可能であるような論理体系が必要である。

例えば聖徳太子と厩戸皇子は、昭和後期の検定教科書では同一人物である。一方で最近の学説では、厩戸皇子は歴史上の人物であるのに対し聖徳太子は伝説上の人物である。これは真田信繁と真田幸村の場合とは異なる。

また別の例で、刑事訴訟に於いて、勾留された被告人、即ち行動説上の被告人が、訴状記載の被告人、即ち記述説上の被告人ではないことを理由にして弁護側が公訴棄却を訴えた場合を考える。この場合には、検察側の信念に於いては行動説上の被告人と記述説上の被告人とは同一人物であるのに対し、弁護側の信念に於いては行動説上の被告人と記述説上の被告人とは別人である。

斯様にして、人名が片方の信念では同一人物を指すが、もう片方では別の人物を指す場合がある。このような信念同士が互いを引用しながら議論する様を記述するには、 $x=y \wedge \Diamond x \neq y$ が充足可能であるような論理体系が必要である。

本発表ではそのような論理体系を設計する。これは、多重世界意味論の各世界の代わりに論理式を置き、また異なる信念の間に概念を共有する項を指定することで実現する。